

高齢不妊治療のリアル～着床前胚染色体異数性検査が治療終結のきっかけとなった症例～

当院での着床前胚染色体検査（PGT-A）の実施者の 42.6%は 40 代で最も多い割合を占めています。

女性年齢が高くなると卵巣機能の低下が認められることと、胚の染色体異常は増加するため、PGT-A を実施するまでに複数回の採卵を実施する可能性があることと、PGT-A を実施できても染色体の異数性を認め胚移植が実施できない可能性が増加します。今までは流産や妊娠に至らない原因はおそらく胚の染色体異常でしょうと言われていたものの、PGT-A を実施することではっきりと結果として表されるようになりました。

着床前胚染色体異数性検査は妊娠率の向上や流産率を低下させることを目的と行う検査ですが、胚移植可能胚が得られないというネガティブな結果も、納得して不妊治療を終結するまでのプロセスとしてはポジティブに働く可能性が示唆され、年齢的に治療終結と隣り合わせで治療をしているご夫婦には PGT-A を積極的にご検討いただいてもよいかと考察します。

今回経験させていただいた看護、そして学会に参加して得られた知識を今後にかけて今後も寄り添いますので、PGT-A や不妊治療の終結についてご検討の方は声をおかけください。